

G. ペレックはいかにして 『人生 使用法』のある章を書いたか

酒 詰 治 男

How Did Georges Perec Construct His *Life A User's Manual*?

Haruo Sakazume

Abstract: This paper discusses how the representative modern French writer Georges Perec constructed his masterpiece: *Life A User's Manual*. Through the analysis of one chapter of this 'novels', relying on the author's comments and on his manuscript as well as on some of the studies done on his work, we try to see how much and in what manner the 'Oulipian constraints' contribute to the realization of this text.

要旨: 本稿はフランスの現代作家ジョルジュ・ペレックがその代表作『人生 使用法』のテキストをいかに組み立てたかを跡づけようと試みたものである。ペレックは所属する文学サークル「ウリポ」の会員たちと共有するいくつかの数学的概念——「制約」と呼ばれる——を駆使して、パリの典型的集合住宅の百の部屋に観察される人物・事物をあらかじめ要素配分し、これを一貫した筋立てを持つ小説の百の章に盛り込んだ。こうして各章に配分された四十二の要素が、最も短い章のひとつ第63章でどのようにテキスト化されているかを、公表された手稿を中心に、作者自身の解説、いくつかの批評・研究に基づいて分析する。

今晚これからお話ししようとしていることを要約すると「ジョルジュ・ペレックはいかにして『人生 使用法』のある章を書いたか」ということになろうかと思えます。すでに同じ趣旨の多くの批評・研究、作者自身による講演さえもが存在するのに、あえて屋上屋を重ねようとするのも、ペレックの代表作のこの側面がこの作家の特性を最も顕著かつ大規模に示していると考えからです。必ずしも翻訳者の立場からの論評とはならないことをあらかじめご承知おきください。

まず作家と作品についての予備知識に類したことをひとつふたつ申しますが、詳細については、資料③に既刊の翻訳・研究リストを挙げておきましたのでご参照ください。

ところでペレックはよく知られているように、「潜在文学工房」*Ouvroir de Littérature Potentielle* の一員でした。1960年にレイモン・クノーとフランソワ・ル・リヨネが創設した十数名の文学者と数学者から

なるサークルで、メンバーの多少の入れ替えを経て現在に至っています。小説におけるさまざまな約束ごと、古典演劇における三一致の規則、詩における詩法など、文学作品のあらゆるジャンルで働いている規則、作法を「制約」という概念のもとに抽出し、ときに数学的概念を適用しながら新しい作品の産出に役立てようというのが彼らのもくろみの主眼です。67年にグループに加わったペレックには特に文字落とし、^{リボグラム}回文などの言語遊戯作品の研究があてがわれますが、単なる探求の範囲をたちまち超越して、内容からも長さからも記録的な実作品をものし、グループの存在を世に知らしめる大活躍をしたことはご存知のかたも多いでしょう。ウリポでのこの種のさまざまな研鑽を集大成しつつ約10年を経て書かれたのが『人生 使用法』(*La Vie mode d'emploi*, Hachette, 1978/水声社, 92年)です。

さて、自ら代表作と自負するこの作品に作家自身が

初めて言及するのは、未だ執筆中の 74 年に刊行されたエッセー『さまざまな空間』においてのことです。「小説の構想」と題された一節で「大略つぎのようなことが述べられます。すなわちパリ市中のある大型建物の正面壁をとっばらい、内部の部屋と人物を一瞬かつ同時に描写する大掛かりな小説を計画していること、ル・サージュの『ル・ディアブル・ボワトゥー』、『源氏物語絵巻』、S. ステンバーグの集合住宅の見取り図などの「鳥瞰図」が着想の源泉であること、描写にいくつかの「形式的手法」が用いられていることなどです。時期からしても分量からしても、自作解説というよりも一種巧みな予告宣伝の趣が濃厚ですが、しかしすでに読者に対する「謎かけ」のようなものが始まっていることも見落とせません。

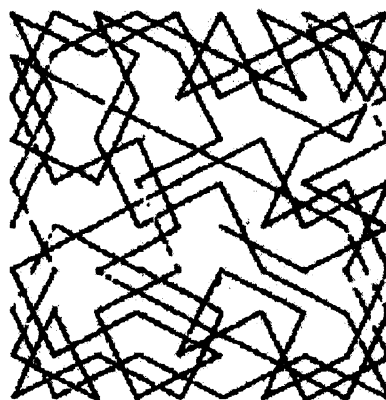
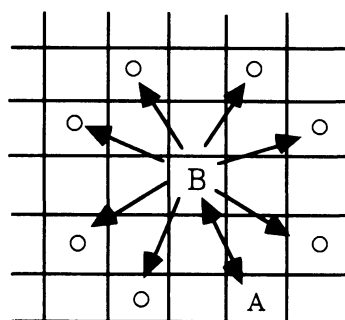
ついで『使用法』刊行の翌年、「アルク」誌のペレック特集号に、「『人生 使用法』のための四つの図形」と題された、今回は明らかに自作解説とみなされる作家の一文が公表されます。表題のとおり、四つの図形あるいは図表が作品成立の根源に働いていることを示すものです。それら四つとは 1. 大型建物の見取り図、2. ナイトの多形図、3. ラテン方陣、4. 明細表と名づけられ、それぞれにつぎのような解説が加えられています。

第一図は大型建物の見取り図。典型的なパリの集合住宅のもので、友人の画学生に描かせたのだそうですが、子細に眺めると、隠れた地下の一階を加えて十階建て、窓に沿って縦にも十の列が識別できます。すなわち原則として 10×10 の格子に対応した 100 の部屋が想定され、その一つひとつを小説の 100 の章にわたって描写してゆこうというのが構想全体の出発点です。

つぎに、各部屋をどのような順番で描写するかが問題になります。たとえば左上から右下に至る単純な順序を選ぶ、あるいは偶然に委ねるという手もあるでしょうが、制約、形式を重んじるウリピアンにとってはそうしたものは論外でしょう。そこで選ばれたのが、チェスの駒ナイトの動きにしたがって、チェス盤の 8×8 のすべての格子を重複することなく、連続した軌跡で経めぐるという、愛好家にはよく知られた独り遊びの原理の利用です。カヴァリエと呼ばれるこの駒は右にご覧のように A の起点から B に跳んだとしますと、さらにそこから○印で示したいずれかの格子に跳ぶことができます。将棋の桂馬に似ていますが、あちらの馬の方がだいぶ自由に跳ねる。ただしこれは四つの図形には含まれていません、念のため。これがもち



第一図



第二図

	Dup.	Dur.	Schust.
1	KV	BR	MC
2	BC	MV	KR
3	MR	KC	BV

第三図

ろん 10×10 の格子に適用されました。その軌跡を示すのが上の第二図で中心近くが起点の第 1 章、左端中ほどが終点の第 99 章にあたります。1 章足りないことについては後に補足します。

そのつぎは当然、各部屋のなにをどう描写してゆくかが問題になります。ここで採用されるのがラテン方陣という数学の配分原理です。作者が解説に用いる最も初歩的なその概念はつぎのようなものです。つまりデュボン (Dup.)、デュラン (Dur.)、シュスタンベルジェ (Schust.) という三人物がいて、それぞれにケピ (K)、山高 (M)、ベレー (B) のいずれかの帽子を被らせ、犬 (C) 鞆 (V) バラ (R) のいずれかの事物を持たせるとします。問題はこの二系列からなる六つの要素を各人物が順繰りに、だがけっして同じものを二度重複して持つことがないような物語を作ることです。そのひとつの可能性を示すのが第三図で、これは2元3次ラテン方陣ですが、ただし『使用法』ではベレックは二つの系列を百の部屋に配分しました。すなわち2元10次ラテン方陣です。

こうして得られた四十二の項目の、第23章に用いられた事例、「明細表」と呼ばれるものが四つめの図表としてこの解説文の最後に掲げられています。時間・空間の節約を図って、今回は後に詳細に見る第63章のものを利用しましたが、原理的には同じものです。こちら(資料②)⁹⁾の右端をご覧ください。つまり百の部屋の描写に予想される「家具、装飾、人物、歴史・地理的言及、文学的暗示・引用、等々」が上のラテン方陣の原理に則って各章に配分されたわけです。

さていかがでしょうか。先に見た予告の一文と比べれば『使用法』の成立過程が飛躍的に明確になったのは確かですが、同時に不明な部分も露わになって、かえって欲求不満が募るといった側面がこの解説文にはないのでしょうか。実際、用いられた手法の全貌とは言えぬまでも、それに近い全体的な輪郭が明かになってきたのは比較的最近のことで、82年の作家の死後少しずつ参照され、後に公表された資料のおかげです。要するに、この「四つの図形」は、『人生 使用法』の公表にあたって作者が最も主張したかった側面、つまりいくつかの形式的手法＝制約が用いられたことを明示するとともに、その細部を隠蔽することで読者の好奇心をいっそう煽るといって、巧妙な謎掛けとして働いた、いまも働き続けているということです。もちろん、作家の側からの意図的な演出でしょう。その後のベレック批評・研究の多くがこの面に関わるものであることがその成功のなによりの証拠です。そこで以下に、それらの成果のいくつかを援用しながら、『使用法』のある章がどのように書かれたのかを、具体的に見てゆくことにします。「四つの図形」を補足する形

をとりながら。どの章でもかまわないのですが、最も短いものひとつという理由から、ここでは第63章をモデルとして選ぶことにします。

第一の見取り図については補足すべきことはほとんどありません。ただここに10×10の格子、すなわち建物の百の部屋＝小説の百の章の図式が潜んでいることをいつも意識しておく必要があります。

第二のナイトの多形図。ウリポの数学系の「顧問」役ベルジュ¹⁰⁾によればこれは「ナイトの駒がチェスで定められた駒の動きにしたがって、各格子を一度ずつ、しかも一度だけ経由しながら、すべての格子を連続した軌跡で埋めつくすことができるか」というグラフ理論の命題で、正式には「有向ハミルトン道」と呼ばれるものだそうです。たとえば、米国の主要四十八都市をセールスマンが最短距離で巡る経路の組み立てなどにも応用された。さて、先の第二図に戻りますが、この多形図を見取り図の百の格子に重ねると、下のような図が得られます。数字は章の順番を示します。上部二階分は屋根裏部屋、下部一階は地下室、中ほどの「枠囲い」は階段です。ついでに、これから取り上げようとしている第63章が左端の下から二つめに位置していることをご確認ください。見取り図では扉になっています。

ところで、先にも触れましたが、多形図の終点は左端の中ほど、第99章です。つまり百にひとつ足りない。これは左下隅の元来第66章に相当するものがわざと省略されたからです。どうして左下隅なのか、どのように省略されているのかについては作家の面白い自伝的エピソードと巧妙な策略が絡んでいるのです

59	83	15	10	57	48	7	52	45	54
97	11	58	82	16	9	46	55	6	51
84	60	96	14	47	56	49	8	53	44
12	98	81	86	95	17	28	43	50	5
61	85	13	18	27	79	94	4	41	30
99	70	26	80	87	1	42	29	93	3
25	62	88	69	19	36	78	2	31	40
71	65	20	23	89	68	34	37	77	92
63	24	66	73	35	22	90	75	39	32
?	72	64	21	67	74	38	33	91	76

が、今は省略します。ただ、ウリポが共有する「クリナメン」という概念が働いていることをご承知おきください。エピクロスが唱えた原子論に由来するものだから、システムは変調があつてこそ十全に機能するという主張です。つまり用いられた手法から過度の数理性を排除しようとする欠陥原理、反制約原理です。

第三のラテン方阵。もちろん、これが最も複雑かつ最も重要な役割を担っており、その分だけわれわれの理解を阻んでいるように思います。端的に言って、この配分原理を用いることで、どうして各章に四十二ずつの項目が割り当てられることになるのか。つまり第三図「ラテン方阵」と第四図「明細表」とのあいだに、上の解説ではあまりにも大きな飛躍があります。少しずつ補完しましょう。

まず、やはりベルジュ⁵が下のような 5×5 の格子を例につぎのような解説を加えています。それによると、1. 方形の 25 の格子の各々がその文字と数字の組み合わせを一つずつ持ち (=2 元) 2. その文字・数字の組み合わせが反復されることなく、3. 文字・数字のいずれもが縦・横のいずれの列でも一度以上反復されない (=直交する) ものが 2 元 5 次ラテン直交方阵を形成します。同じ条件を充たす 2 次、6 次、10 次の方陣は長年ありえないとされてきましたが、10 次に関しては 60 年に米国の数学者が可能性を証明しました。早速ベルジュがこれをウリポに紹介し、小説への応用が早くから検討されていたというわけです。

ではなにが、どのように方陣を通して配分されたのか。遺された資料によれば、まず四十二の要素が選択されました。資料②の左に番号をつけて列挙してある「態勢」、「活動」などです。ところで、これらの要素のそれぞれは十ずつの下位項目をひきつれている。右にご覧のように、それぞれの項目に 1~0 の数字が付けられています。この要素 1 と 2 の二系統を成す 1 から 0 の十ずつの数字がペアにされて 10×10 の方陣に、先に見た条件を充たしつつ配分されました。右に

A0	B1	C2	D3	E4
E1	A2	B3	C4	D0
D2	E3	A4	B0	C1
C3	D4	E0	A1	B2
B4	C0	D1	E2	A3

ご覧のものです。斜線の左が「態勢」を、右が「活動」を示します。第 63 章に相当する格子の数を太字で強調しておきました。5/3 となっています。つまりこの章では「立っている」態勢と「化粧」という活動がテキストに見られるはずだ、ということになります。同じ操作が要素 3 (引用 1) と 4 (引用 2) のペア、5 と 6、以下同様に 40、41 まで計二十一回反復されました。用いられた方陣の配列は毎回異なったもので、その変換には「疑似クニース」と呼ばれるまた別の制約原理⁶が応用されていますが、話が複雑になりすぎるので省略します。

1. 態勢	2. 活動
1 ひざまずいた	1 描く
2 降りる, うずくまった	2 維持する
3 腹這いになった	3 化粧
4 座った	4 エロティック
5 立った	5 分類する, 整理する
6 のぼる, 地面より高く	6 図を使う
7 入る	7 修理する
8 出る	8 読む, 書く
9 仰向けになった	9 木片をもつ
0 腕を振り上げた	0 食べる

さっそく、さらにいくつかの補足が必要でしょう。まず四十二の要素について、3、4 の「引用」ではフロベール、スターンなど、総じてペレックの偏愛する、あるいはウリポに関わりのある作家が十人ずつ選ばれ、それぞれの作品の一部が引用されます。5 の「数」とは部屋に観察される人数、7 の「第三部門」とはル・リヨネが規定した文学・疑似文学以外の文献で、三面記事、書誌、記事・辞典・規則、通知状、レ

1/1	6/9	0/2	8/6	3/5	7/8	5/0	9/4	2/3	4/7
8/7	1/8	6/0	9/5	4/6	2/2	7/9	0/3	3/4	5/1
9/6	3/3	1/9	0/4	5/7	8/1	2/8	7/0	4/5	6/2
0/5	8/2	3/8	1/0	6/1	9/7	4/4	2/9	5/6	7/3
2/0	9/1	5/5	3/9	7/2	0/6	8/3	4/8	6/7	1/4
4/9	0/7	8/4	5/8	1/3	3/0	9/2	6/6	7/1	2/5
6/8	4/0	9/3	7/7	2/4	5/9	0/1	8/5	1/2	3/6
3/2	5/4	7/6	2/1	9/9	4/3	6/5	1/7	8/8	0/0
5/3	7/5	2/7	4/2	0/8	6/4	1/6	3/1	9/0	8/9
7/4	2/6	4/1	6/3	8/0	1/5	3/7	5/2	0/9	9/8

シピー、薬局の広告ビラ、手帳・カレンダー、プログラム、辞書、使用法・案内書・必携などを内包します。15の「長さ」とはテキストの長さ、16の「雑」は武器、金銭、病気、紋章などとまさに雑多です。27の「タブロー」ではやはり作家好みの画家十人のいずれかの作品が選ばれ、その絵の細部についての描写あるいは暗示が行われます。28の「書物」は「引用」と似ているのですが、これについてはベレックを含むさらに十人の作家たちのいずれかの作品への暗示が行われます。マッシューズとクノーが「引用」に重複して姿を見せます。最後の「カップル」というのは「ローレルとハーディー」、「鎌と槌」、「ラシーヌとシェイクスピア」、「フィレモンとポーシス」、「罪と罰」、「高慢と偏見」、「夜と霧」、「灰とダイヤモンド」、「耕作と牧畜」、「美女と野獣」の対概念で、それぞれの片方がカップル1と2の十の項目を成します。

しかし中でも最も複雑な働きをしているのは39と40の「欠如」と「虚偽」です。再び資料②をご覧ください。その左端に、最後の二つを除外して、先の四十二の要素が四つずつ括られて、①から⑩の番号がつけてあります。たとえばラテン方陣がある章で1/1を指示したなら、その章の要素の1から4までのいずれかの項目が不在となり、また同じ要素1から4までのいずれかの項目が、当初に指示されたのと違ったものにあえて変更されることとなります。他のものとは明らかに性質の異なるいわば「メタ要素」です。おわかりのように、方陣の厳密な配分原理を緩和するための欠陥原理、すなわちあのクリナメンがここにも導入されていることとなります。ただし最後の「カップル1, 2」はこの欠如・虚偽の対象外とされるのですが。

さて、このようにして百の章のそれぞれで言及されるべき原則的な四十二の項目があらかじめ決定されました。「残るはこのような継続的な変化を正当化する物語を作り上げるだけでよい」（「四つの図形」, p. 52）こととなります。では問題の第63章はというと、何度も見ていただいている資料②の右端がその具体例です。「明細表」から写したものです。1「立っている」、2「化粧」以下41、42の「罪」、「ポーシス」まで、確かに四十二項目並んでいます。すでにメモ、加筆の類が散見されますが、それらについては後に補足することにします。

それでは他方、これをもとにして書かれた第63章のテキストはどのようなものなのか。「通用口」という副題を伴っていますが、実際には作品を通してのべつパーティーの用意をしている、二つ上の階のアルタ

モンの家族に大半が関る物語内容です。その四部屋分を「網かけ」にしておきました。全般に裕福な所有者は多くの部屋からなるアパートマンを所有し、したがって数章にわたって言及される。ここではそのパーティー用にご馳走を運んでくる五人の配達の人たちと、猫を連れ戻しにきた近隣の女が登場します。初めに申しましたように一番短い章のひとつですので、拙訳を全文掲げることにはします。念のため資料①に原文も引いておきました。

第63章 通用口

パイプ類の縦横に走る長い廊下。床はタイル敷き、壁は古びたプラスチック加工の紙で所々が覆われ、ほんやりと一群の椰子の木を描きだしている。両端にある曇りガラスの電球の冷たい光がそれを照らしている。

五人の配達人がアルタモン家に祝典用のさまざまな食料を持って入ってくる。一番背の低い男が、かれよりも大きな家禽の重さに身をたわめながら、先頭をきっている。二人めはこの上なく慎重に、デコレーション・ケーキのように並べられ、造花で囲まれた東洋の菓子類——バクラバ、コルヌ・ド・ガゼル、蜂蜜とデーツの菓子——の入った銅製の平打ちの大きな盆を運んでいる。三人めは製造年号入りのヴァッヘンハイマー・オーバーストネストの瓶を三本ずつ、両の手に持っている。四人めは頭上にブリキの板を載せているが、それは肉のプチ・パテ、熱いアントレ、カナッペに覆われている。最後の五人めは、右肩にウイスキーを一ケース載せて殿を勤めているが、そのケースにはステンシル塗りの文字で次のように書かれている。

トマス・キッズ

インペリアル・ミクスチュア

純度 100 パーセント スコッチ・ウイスキー

ボレリー・ジョイス・アンド・ケイヘーン社

が

スコットランドでブレンド、瓶詰め

スコットランド、ダンディ、モンゴメリー・レーン 91 番地

前景では、最後の配達人を少し遮るかたちで、女が一人建物から出てきている。五十がらみで、レインコートを着ている。ベルトに施し物袋、黒の皮紐で閉じられた緑の革の財布がつけられている。頭はプリントの綿のネックチーフで覆われているが、その模様はカルダーのモビールを思わせる。両腕に灰色の雌猫を抱えてをり、左手の人さし指と中指の間にルーダンの描かれた絵葉書を挟んでいる。マリー・ベナルとかいう女が家族全員を毒殺した廉で起訴された西部フランスのあの町のものだ。

婦人はこの建物ではなく、隣のその住人だ。レイディ・ピッコロという優しい名の彼女の猫は、たぶんどこかの雄猫と出会うことを夢見てだろう、この階段でたっぷり何時間も過ごす。だが残念ながらそれは果敢ない夢だ。と

いうのも建物の雄猫たち——モロー夫人のピップ、マルキゾー家のプティ・プース、そしてジルベール・ベルジェのポーカー・ダイス——はことごとく断種された猫たちだからだ。

どうでしょうか。「明細表」の四十二の項目がどこかにあるはずですが、一瞥の段階でどれほど識別が可能でしょうか。「猫」だとか「レインコート」のような具体的事物はもちろんのこと、「中東」（＝菓子類）、「罪」（＝犯罪）というような抽象概念も比較的容易にそれとわかります。確かに、人物たちに座っている者はおりませんし、「夢を見る」は猫のピッコロが達成しています。ただし「化粧」はどうでしょうか。明細表の手稿では、この横に「配達夫が木箱を運ぶ」という記述が入っており、どうやら *toilette* という語のごく特殊な語義が利用されているようです。日本語で「化粧箱」というような。「引用」のルッセルとはもちろん、ウリボの始祖にあたるようなもう一人の言語遊戯の作家レイモン・ルッセルのことですが、ここでは「一番背の低い男が、かれよりも大きな家禽の重さに身をたわめながら、先頭をきっている」の一文が『いかにしてわたしはある種の本を書いたか』から借用されています。ハリー・マッシュューズは米国出身のウリピアンでベレックと最も親しかったひとり、『アフガニスタンの緑の芥子畑』から「製造年号入りのヴァッヘンハイマー・オーバーストネストの瓶」の一句が引かれています。28の「書物」も含めて、三十人の作家たちから十箇所ずつ、作品全体で三百回にわたって引用・暗示されていることにはなりますが、それらはカッコに括られているわけではなく、巻末の「断り書き」のおかげでかろうじて剽窃を免れている体のもので、よほどの「専門家」でも見抜くことは困難です⁷。7の「三面記事」はというと、「現代百科辞典『クイド』の「有名な毒殺事件」の項目に「レオン・ダヴィヨウの妻、マリー、旧姓ベナールが11人を毒殺のかどで告発され、長い裁判の末1961年12月に無罪放免された」という記述があります。

まあこのあたりまでは比較的「素直」なのですが、そろそろ「曲芸」に類する事態が始まります。14の「家具」では、カナッペが料理のそれに入れ替わっています。また、たとえば11の「第二次大戦」はどうでしょうか。実は章のなかほどにあるウイスキーの瓶のラベルがとてつもない「曲者」で、いくつもの項目を隠しています。すなわち一番下の会社の所在地「モン(ト)ゴメリー」は大戦で活躍したイギリスの将軍の名であり、「インペリアル」が「帝政様式」を、トマス

・キッズが原作の作者で『ハムレット』を、イタリアの天文学者のボレリが自ら発見した小惑星「ボシス」を、ナボコフの『ロリータ』の翻訳者ケイヘンが「ボルノ」を、はては「ジョイス」が音声の類似から「歓喜＝ジョワ」を充たしているといった具合です。つまり元来の要素、項目の概念、語義を大幅に逸脱して、かなり恣意的な、いわば「苦しい」合理化を果たしながら、あたかもゲームさながらにテキストの編み目が埋められている様子が窺われます。

さらに27「タブロー」ではポージャンの『チェス盤のある静物』が選択されました。BEAUGIN, Lubin (1610~63)、イタリアで修業した宗教画と静物画を得意とするフランスの画家です。画面中央にある大きな黒い「施し物袋」がこの項目を充たすと同時に16「雑」の項目「僧侶」を属性として示してもいます。つまり一事物が二項目を担っている。32の「ゲーム／玩具」は猫の名「ポーカー・ダイス」が表わしています。37の温室栽培の花は草稿では造花でも構わないことになっている。最後の41、42カップルについてはすでに見たとおり、「犯罪」と「ボレリ」が「罪」と「ボシス」を暗示しています。この二つは欠如、虚偽を免れるので、各章に姿を見せますが、元来の組み合わせ——1/1、2/2など——を取り戻す稀な場合を除いてはいつも暗示的にしか言及されません。

ところで「欠如」、「虚偽」ですが、この章では欠如は3（＝項目9~12）を、虚偽は1（＝項目1~4）を指定しています。10の「モケット」に欠如を意味するMという略号がつけてありますが、なるほどこの章にはついにモケットは見当たりません。「虚偽」には「引用2」が選ばれ、元来のビュートルが抹消され、代わりにマッシュューズが選ばれています。

どうしても見当たらないのが、資料②の一覧表に「枠囲み」で示しておきましたが、眼鏡と現代音楽、そして円いという形状です。もっとも最後のものは電球、Oの字、あるいは0という数字が表わしているという理屈だって通用しないわけではないのですが。

さて、そろそろ総括に入りましょう。この章に見たように、配分された四十二の要素は必ずしもすべて最終稿にまで維持されたわけではない。たとえば章の数で一番多いのは「階段」ですが、場所柄どうしても不自然に見える事物が方陣を通してここに配分されることも避けられません。通用口にモケットを置きにくいと同じ理屈です。ですから欠如・虚偽の原理は一面、制約のあまりにも厳しい規制の緩和策としても働いています。だが、語義のはなはだしい歪曲を含むあ

らゆる努力にもかかわらず、すべてがテキストに実現されたわけではなかった。少々がっかりされる向きもおありでしょうが、いかに苦吟しようとも、明細表の項目が最終的に半数ほどしか維持されなかった章もあります。物語が進行するにつれて、「本当らしさ」が優先され、枝葉が刈り込まれたということもあるでしょう。たとえば、第63章で、人物のひとりに眼鏡を掛けさせるのは容易なことでしょうから。しかし重要なことは『人生 使用法』のすべての章が基本的にこのような制約を遵守して書かれたということであり、またこのような組織的な手法を用いて書かれた小説はかつてほとんどなかったということです。

時間のこともありますから、以下にふたたび補足事項を箇条書きふうにと並べて結論がわりにさせていただきます。

まず、物語内容に関わることから。達成されなかったものもありますから、あくまで原則論とはいえ、作品全体では四千二百前後の項目があらかじめ設定されたこととなります。これらを踏まえて物語を組み立てるという作者の作業がゲームに酷似していることは上にも見たとおりです。ところでよく知られているように、その物語のただ中にジグソー・パズルの組み立てに一生を賭けるバートルブースという主人公が設定されて平板に傾きがちな建物の描写をいわば立体化します。作者自身の作品組み立てをめぐる苦闘をなぞりなおすというその主人公の営為が、半ば当然とも思われるほどにみごとな筋立てを成していることこそがこの作品のなによりもの特性です。

第二に、上に見たようないくつかの制約は『使用法』の全体を支配する代表的かつ基本的なものであることは確かですが、しかしこれらは用いられた制約のすべてではありません。全体に関わる他の制約としては他にもたとえば各章が格子に占める位置に関する数字、他の自作への言及、執筆中に起きた出来事に関する暗示などがあります。ちなみに第63章では、縦軸の9番目の格子／横軸の1番目の格子という位置から、ウイスキー会社の所在地の91番地が得られています。さらにこれらの数字では、作者の伝記要素に密接に関わる43, 11（母親の命日43年2月11日）などが複雑な含意の編み目を引き連れているという指摘⁶⁾もあります。また自作への言及については、あの毒殺事件が『ぼくは思い出す』の第351項目でも取り上げられていることを言い添えておきましょう。もっとも「執筆中の出来事」というのは作家に確かめるしかなかったのですが。なお部分的制約としては第51章の

ヴァレーヌの絵の解説文から成る「概要」、第59章のウリポ成員の名を織り込んだイボグラフなど、いずれも手のこんだものがよく知られています。

最後に、いささか我田引水になりますけれども、このような組織的かつ精密このうえない「手法」を用いた小説のゲームさながらの組み立て、そのような事実をめぐる読者を対象とした隠蔽と露呈の駆け引き、物語世界の水準での徹底的なりアリズム追及などが、たまたま第63章にも姿を見せたレイモン・ルツセルのそれと酷似していることは見逃せません。ただしこちらはもっぱら語の音声的な類似を徹底的に利用するものですが。いずれにせよ両者に共通するこのような広義での言語遊戯的な作品概念が将来に向けての創造に大きな可能性を示唆していることは間違いなさそうです。

ご静聴ありがとうございました。

註

- 1) *Espèces d'espaces*, Galilée, 1974, pp. 57–58.
- 2) *Quatre figures pour La Vie Mode d'emploi*, in *L'Arc* 76, 1979.
- 3) 1993年に『人生 使用法』に関わる手稿のほとんどを含む大部の資料集 *Cahier des charges de La Vie mode d'emploi* が Zulma から刊行された。資料②はその手稿のいくつかの部分を書者が組み合わせたものである。
- 4) Claude BERGE, Eric BEAUMATIN, *Georges Perec et la combinatoire*, in *Cahiers Georges Perec* 4, Edition du Limon, 1990, pp. 83–96.
- 5) 同上。
- 6) この変換にベレックはセクスティーヌの脚韻の配分に由来する「クニース」と呼ばれる原理を応用した。詳しくは Bernard Magné, *Cinquième figure pour la Vie mode d'emploi*, dans *Cahiers Georges Perec*, N° 1, P. O. L., 1985. あるいは前掲書 *Cahier des charges de La Vie mode d'emploi*, Zulma, 1990. の「まえがき」などを参照。
- 7) 『人生 使用法』における作家の引用と暗示については、参照書目を含む草稿が Ewa Pawlikowska によって雑誌 *Texte En Main* の第6号、1986年に再現されている。
- 8) とりわけ Bernard Magné, *Georges Perec*, Nathan, 1999. の第4章を参照。

追記

この論考は東京日仏学院が主催する講演会シリーズ「作家とその翻訳者」の第5回目として2001年5月31日に筆者が口頭発表した内容をメモをもとに再現したものである。

資料①

CHAPITRE LXIII
L'entrée de service

Un long corridor sillonné de tuyauterie, au sol carrelé, aux murs partiellement couverts d'un vieux papier plastifié représentant vaguement des groupes de palmiers. Des globes de verre laiteux, à chaque bout, l'éclairent d'une lumière froide.

Cinq livreurs entrent, apportant aux Altamont diverses victuailles pour leur fête. Le plus petit marche en tête, succombant sous le poids d'une volaille plus grosse que lui ; le cuivre martelé chargé de pâtisseries orientales — baklava, cornes de gazelles, gâteaux au miel et aux dattes — disposées en pièce-montée et entourées de fleurs artificielles ; le troisième tient dans chaque main trois bouteilles de Wachenheimer Oberstnест millésimées ; le quatrième porte sur la tête une plaque de tôle couverte de petits pâtés à la viande, entrées chaudes et canapés ; le cinquième, enfin, ferme la marche avec, sur l'épaule droite, une caisse de whisky sur laquelle est écrit en caractère peints au pochoir :

**THOMAS KYD'S
IMPERIAL MIXTURE
100% SCOTCH WHISKIES
blended and bottled in Scotland
by
BORRELLY, JOYCE & KAHANE
91 Montgomery Lane, Dundee, Scot.**

Au premier plan, masquant partiellement le dernier livreur, une femme sort de l'immeuble : une femme d'une cinquantaine d'années, vêtue d'un imperméable à la ceinture duquel est accrochée une aumônière, une bourse de cuir vert fermée par un cordonnet de cuir noir, la tête couverte d'un foulard de coton imprimé dont les motifs évoquent des mobiles de Calder. Elle tient dans ses bras une chatte grise et, entre l'index et le médium de sa main gauche, une carte postale représentant Loudun, cette ville de l'Ouest où une certaine Marie Besnard fut accusée d'avoir empoisonné toute sa famille.

Cette dame ne vit pas dans l'immeuble mais dans celui d'à côté. Sa chatte, qui répond au doux nom de Lady Piccolo, passe des heures entières dans ces escaliers-ci, rêvant peut-être d'y rencontrer un matou. Rêve illusoire hélas, car tous les chats mâles de la maison — Pip, de chez Madame Moreau, Petit Pouce, des Marquiseaux, et Poker Dice, de Gilbert Berger — sont des chats coupés.

資料②

①	1	態勢	立っている
	2	活動	化粧
②	3	引用 1	ルッセル
	4	引用 2	ゼットーラ マシューズ
③	5	数	+5 人
	6	役割	配達人
	7	第三部門	三面記事
④	8	主題?	夢を見る
	9	壁	柄もの壁紙
	10	床	モケット M
	11	時代	第二次大戦
⑤	12	場所	中東
	13	様式	帝政様式
	14	家具	寝椅子, カナッペ
⑥	15	長さ	~1 ページ
	16	雑	僧侶 施し物袋
	17	年齢/性別	女 35-60 歳
	18	動物	猫
⑦	19	衣服	レインコート
	20	繊維 (材質)	柄ものプリント
	21	繊維 (性質)	綿
	22	色彩	グレー
⑧	23	アクセサリー	ベルト
	24	装身具	眼鏡
	25	読書	ボルノ
	26	音楽	現代音楽
⑨	27	タブロー	ボージャン 施し物袋
	28	書物	ハムレット→トマス・キッド
	29	飲料	アルコール
⑩	30	食料	豚肉製品
	31	小家具	彫刻, モビール
	32	ゲーム・玩具	サイコロ
⑪	33	感情	歓び
	34	絵画	絵はがき
	35	形状	円い
⑫	36	形体	球体
	37	花	温室栽培の花
	38	小装飾品	銅・錫
	39	欠如	3 における欠如
⑬	40	虚偽	1 における虚偽
	41	カップル 1	罪
⑭	42	カップル 2	ボレリーが惑星 バウキスを発見

資料③

Œuvres de Georges Perec

Les Choses. Une histoire des années soixante, Julliard, 1965./『物の時代』, 白水社, 78年。

Quel petit vélo à guidon chromé au fond de la cour?, Denoël, 1966./『小さなバイク』, 上と合本。

Un homme qui dort, Denoël, 1967./『眠る男』, 晶文社, 70年。

W ou le souvenir d'enfance, récit, Denoël, «Les lettres nouvelles», 1975./『W あるいは子供の頃の思い出』, 人文書院, 95年。

La Vie mode d'emploi, romans, Hachette, «Littérature-POL», 1978./『人生 使用法』, 水声社, 92年。

Le Voyage d'hiver, Seuil, «Librairie du XX^e siècle», 1993 [1979]./『冬の旅』, 書肆風の薔薇 (ウリポ特集), 91年。

Récits d'Ellis Island, Histoires d'errance et d'espoir (avec Robert Bober), Ed. du Sorbier, 1980./『エリス島物語』, 青土社, 2000年。